
乙女の祈り

まりか姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女の祈り

【Nコード】

N0601E

【作者名】

まりか姫

【あらすじ】

桜の咲く季節。ある日2人は出会った。極普通で地味な奈花^{なか}みためは不良っぽいけどとてもやさしい竜^{りゅう}2人の恋は桜があったから。友達沙梨奈^{さりな}凜柚^{りゆう}のおかげで別れの危機を逃れる。切なくて、青春な一人の少女を描いたこの作品乙女の祈り。是非読んでみてください。

1章 乙女の祈り

ねえ覚えてる？

彼方とであつたのも

こんなふうに桜がさいてたよね・・・

彼方はいまどこにいるの？

彼方がいなくて私はつらい。

彼方は私に生きる大切さを教えてくれました。

彼方が・・・

1章 乙女の祈り（後書き）

まりか姫＊まりな&ゆか

出会い

ああ……。新しい高校だからはりきってきたのに。
思ってもいなかった。

「私1人なんかういてんだけどお。」

奈花は、とっってもお上品なことで不良学校に入ったのはまちがい。

わぁ！

ずって！！

「もういったーい！」

その目の前で紗梨奈がころびました。

紗梨奈との出会いはこれでした。

紗梨奈とは毎日あそぶほど仲良くなりました。

「今日屋上で弁当たべない？」

「いいよ！」

この日屋上に行かなければ私はこんなにつらい思いをしなくてよか
つてのに・・・

「うわぁっ！ひとっぱい」

「いすにすわろうよ！」

私はここに座ったことをいまでも後悔している。

ぼっと。

と音がした。

上を見たら男子が一人

屋上倉庫でごはんをたべていた。

「弁当落ちたよ。」

「うっせーな馬鹿！」

そして男子は逃げていった。

「ねえ、あの男子めっちゃかっこよくなかったあ？」

「ぜんぜんっ！あんなだらしのない男子いや。」

「ちょっとトイレいつてくるねえ。」

紗梨奈がトイレにいった。

紗梨奈がいないと何もできない私。

情けない。

あつ。やっと紗梨奈もどってきたよ。

「奈花ー！トイレ前でばったりさっきの男子にあってメアド交換しちゃったあ♪竜っていうんだってえ！」

そう。竜。一生忘れることのできない存在だった。

「そうなんだ・・・。」

なんかその話してたらだるくなってきた。

「ちょっと今日は帰る。」

歩いていた。

ふと見ると竜がたっていた。

「ちょっとあなた授業中でしょ！戻らなくていいの？」

でも突然ふらあつとして倒れてしまった。

鼓動

目を開けたら知らないところにいた。

目の前に竜がいた。

「おまえあんま無理すんな。低血圧だろ。」

「別に無理なんかしてないもん。とにかく帰ります。」

「つかここ保健室だし・・・。」

「だからなんなんですか！教室戻ってよねもうっ！」

「がんこだなあ。かわいくねえ。」

どうせ私は頑固でかわいくないですもんねっ。

なにこいつめちゃくちゃむかつく！

私は竜のことかんちがいしていたみたい。

顔は不良っぽいけど、

倒れた私を運んでくれた。

ん
ん？

静
ま
っ
た。
。

・
・
・
。

気がついたら竜がキスをしてきた。

きゃああ!!

ファーストキス奪われた!!

「おまえが気に入った。付き合ってください。」

「はい。」

無意識のうちにへんなことをいつてしまった。

どくどくどくどくどく。

もう心臓とまりそう！

なにいつてんの私

どくどくどく。

そのあとにながあつたかよくおぼえていない。

とにかく二人の鼓動が・・・。

どくどく・・・。

どくどくどくどくどくどく・・・。

想い

--*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*

その後、また気を失ってたみたいで、竜くんはいなく

なっていた。

どうしよう…

ボーってしてて、いつのまにか付き合うことに

なっちゃってるし。

ファーストキス、奪われちゃったし。

もうちょっと、しっかりしてればよかったな…

そういえば今って、授業中だよね？

紗梨奈がいないと、やっぱり不安だなあ。

はやく、授業終わっちゃえ！！

キンコーンカーンコーン♪~

「あッ、チャイム鳴った！！」

私は、保健室を飛び出して、教室にむかった。

「奈花、見つけた！」

え！？？紗梨奈？！？

どうしてうしろにいるの？

「奈花、無理しちゃダメだって！
保健室にいらなくていいの？？」

「あ、うん。もう大丈夫だよ」

紗梨奈は、私が来た方と反対側の階段で、保健室に

向かってたみたい。

入れ違っちゃってたんだ！？

「そう？ならよかった！！」

そういえば。奈花、竜くんと付き合い始めたんでし　よ？？」

紗梨奈、なんでもうそんな事知ってるの？？

「紗梨奈ッ！！その話、誰から聞いたの！？」

私が、そう質問すると、紗梨奈はきょとん、として

「竜くん本人に聞いたよ♪メールでだけど☆」

ええ〜〜〜!!

あの人、口軽いんじゃない!?

「奈花、とにかく教室戻ろ？」

用具、鞆にしまわなきゃね!」

「うんー」

ってゆーか、誤解解かないといけないのに!!

--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

教室に戻ると、まだ先生はまだ来てなかったみたい。

ほとんどの子が、席を立ってお喋りしてる。

「ほら、奈花。竜くんにお礼言わなくていいの？
奈花が倒れたのを、助けてもらったんでしょ？」

そんなことまで、知ってるなんて。

もしかして、授業中にメールで聞いたのかな？

「竜くんって、他のクラスぢやなかったの？」

「やだ奈花、気づいてなかったのー！？」

「うん。他のクラスだと思ってたよ」

こんなことなら、最初にクラスのみんな、覚えとけば

よかったな。

「ほら、あそこにいるじゃん。窓際の…うしろから4番目の席」

紗梨奈は、そういうながら窓際のほうを指さした。

あ、本当だ。竜くんがいる――。

そう思いながら、竜くんをみると…

竜くんが私と紗梨奈のほうをみた。

あ、やだ…目があっちゃったよー！！

なんだかかわかんないけど、ドキドキしてる…？

そんな自分の反応に焦っているとき、

竜くんが、私にとって手を振ってくれた。

だけど、私は恥ずかしくなっちゃって。

手を振らずに、会釈していた。

「奈花、なに会釈してんの～！手、振らなきゃ」

なんかまた頭くらくらしてる。

どうしちゃったんだろう、私…。

「だって…恥ずかしいよ。紗梨奈だったら、手振ってる？」

「当たり前じゃん！！」

紗梨奈っ…って強いな。

私、なんでこんなに頼りないんだろう。

竜くんにまで、嫌な思いをさせることになっちゃうの

かなあ？？

『みんな、席ついて〜!!』

突然、学級委員さん2人が黒板の前に立って、みんなに指示をしはじめた。

「奈花、ぢやあまたあとでね!!」

紗梨奈は、くるりと私に背を向けて席についた。

『今日は、先生が出張してるから、日直は帰りの会を始めて!』

ふくん、先生、出張したんだ？

そう思いながら、私は急いで用具を鞆にしまった。

『今から歸りの会を始めます——』

そんな、日直さんたちの声を、私は聞いてるフリして

いて、全然聞いていなかった。

竜くんに、なんて説明しよう???

[illegible]

『起立！』

そういわれて、私はハッと我にかえった。

いつの間にか、帰りの会は終わっていたみたい。

『さようなら』

『さようなら!!!』

あー、終わった終わった~~~~!!

早く帰りたいなあ。。。。

「奈あゝ花ッ!! 帰ろう?」

「紗梨奈!! うん、帰ろう!!」

「つとその前に。奈花、竜くんほったらかしにするの?? 彼女でしよ???」

そうでした、わすれてた。

竜くんッ!!!

っていつでも。

どうしたらいいの?

私、なんか…気まずいよッ!!

「竜くん!!」

え!?! そんな、ちょっと待ってよ!!

紗梨奈は、行動力ありすぎで、いつも元気。

私も、見習わないといけないなあ。。。

「あ、奈花!!...と、紗梨奈」

「ちょっと、オマケみたいに言わないでよ! 私、ショック!」

男子にも、普通に話せてて。

すごいなあってつくづく思うよ。

「悪いなッ! でも、ホントのことだしな!」

「うわ、ひどくない!?! せっかく私が奈花連れてきたのにッ!」

私、出る幕ない。

この2人、結構お似合いなんじゃないの?

「冗談だって!! 奈花のことに关しては感謝してますって!!」

「ready???」

「ホントだって!!」

ほら、奈花が会話についてこれてないじゃん」

え!?!?! 私ッ?

「あッ、ごねんね奈花!!
ってか、帰ろうよ!?!」

「うんッ!」

「奈花、やっと第一発言!! オメデトーー!!」

竜くんが喜んでる!?

少ししか発言してないのに。

「竜くん、はしやぎすぎだし〜!!
いいやッ、行こッ!」

私達は、教室から出て、靴箱に向かった。

こんな日が数日間続いた。

奈花の周りにはいつのまにか友達がいっぱいいた。

こんなたくさんの人に囲まれて。

こんな楽しい時間を過ごせて。

幸せだった。

私も竜にとって大切な存在になりたい。

高校で生まれ変わりたいんだ。

「私今日やっぱりかえない。竜君にとっての存在になりたいの。
明日。明日でいい？」

あの時生まれ変わっていなければ、こんなこともしなかっただろうしこんな悲しい思いをしなくてよかったのに。

そのまま走っての沙梨奈のお姉さんの由香さんが運営する美容院にいった。

由香さんにはいろんな相談にのってもらっているのだ。

「私彼ができました。生まれ変わりたいんです。」

そして生まれ変わった。

真っ黒な髪はきれいな茶色に変わり。

カールして、メイク道具もかいなおしっちゃって。

いつきにお姉さんにはや変わり。

気合ありあり。

明日、竜なんていうかな？

学校に言ったら

「奈花ちゃんかわいい♪」

「竜もこんな彼女いてうらやましいな。」

「それにしても竜くん遅いな。」

竜くんがきた。

「奈花？」

「似合わない？」

「似合わなくはない……。でも俺はそのままのお前が好きやあ。」

そのまま歩いていってしまった。

とても胸が壊れるくらい悲しんだ。

心が碎けてしまった。

竜は本当に奈花のことが好きなの？

「竜……。私……。」

「そのかつこうめっちゃかわいいよ。さっきはきつい言い方してごめん。あまりにもかわいかったからほかのやつにとられるのが嫌で、きついことをいってしまって。ホントごめん。」

竜はそんなに私のことを。

うれしさで涙が。

きやあー

竜がスカートを引っ張った。

「スカート短い。パンツ見えるぞ。」

カア。

顔を真っ赤にして笑った。

あたしはとても幸せです。

竜大好き。

ありがとう。

そのときは思った。

2章＊桜

ねえ覚えてる？

彼方と喧嘩してた時、

最後には、
“必ず”彼方から、

謝ってたよね？

最後には、
あの桜の木の下で仲直りしたよね。

彼方はいま、笑っていますか？

彼方がいないのに、

私は笑っていないきやいけないの？

あの桜も激しい風をうけ

怒
っ
て
る。

激
し
く
花
び
ら
を
舞
い
上
げ、

お
こ
っ
て
る
ん
だ。

彼方がいないと、笑えないし、

一番に、私の笑顔を見てもらいたいの、

彼方なんだよ？

それなのに、

それなのにー。

・
・
・
・
。

なにも伝わらなかった・・・。

彼方と過ごした9年間はなんだったの？

でも竜は私の心の中で

花を咲かせ、

心のなかできっと生きてるんだよね。

私は桜の花びらをかき集め、

上に投げた。

下に落ちていく

花びら。

桜の命は短いように

彼方の命も短かった。

不安

春――。

私たちは、無事に高校2年生になった。

まわりにいるメンバーはそのまま。

大学でも、多分変わらない。

私達の学校は、中学から大学まで、希望すればエスカ

レーター式で進学できるから。

--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

「あッ!!!! おはよう、奈花!」

校門の前でうしろから、紗梨奈が声をかけてきた。

「おはよう、紗梨奈。」

今日から、高2だね」

「うん！！奈花と同じクラスだといいなあ…。
ってゆーか、奈花！やっぱ高1の頃と、雰囲気
違うね！」

そう。私は、あの時—。

高1の最後の2月に、生まれ変わった。

【地味だった私】から、
【童の為の私】に生まれ変わ
ったんだ。

生まれ変わってから、もっと友達が増えたし、

自分にも、竜の彼女としての自身も…

ついたと思う。

「私も。紗梨奈と同じクラスがいいな。

雰囲気？それは、竜くんの為だから!!」

「そうなんだあ!？」

いいなり、あんなカッコイイ彼氏がいて…

私も、彼氏ほしいなあ。。。」

紗梨奈自身は気づいてないけど、紗梨奈って結構

モテてるんだよ？

…紗梨奈が気づいてないだけ。

「紗梨奈、可愛いし、彼氏なんてすぐできるよ。

気になる男子とか、いないの？」

「え！？！？／／／」

「その顔！！さては、いるんでしょ？？」

「いないって！！／／／」

ホントかなあ？？

…にしては、紗梨奈。顔赤いけど！？

「ま、いいやしょうがない。

掲示板…あッ！！クラス替え、発表されてる！行こ

ッ、紗梨奈！！」

私は、そう言って紗梨奈の手を引っ張って、走り出した。

「え！？ホント？？？」

「ちょ、奈花待って！！」

紗梨奈は、転びそうになりながらも、何とか…
着いてこれていた。

「……あ、あった！！ 私達、3組だよ！！」

竜くんは……やだ、4組…」

紗梨奈と同じクラスで、嬉しかった。

…けど、竜くんと、クラスが離れてしまった。

「うそお、奈花と竜くん、一緒ぢやないの！？」

私は、奈花と同じでよかったけど、そんな…」

「うん、そうみたい……。なんか、ショック…」

どうしよう、クラスはなれっちゃった…」

まさか、クラスはなれたくらいで、【別れるコト】

になんか…ならないよね！？！？

「でも…、大丈夫だよ。」

竜くんは、そんなコトくらいで心がわりする

ような人ぢゃないもの」

紗梨奈のいうとおりだ。

そう思う。

でも。

なんか、嫌な予感がする。

この、嫌な予感って…

・ ・ ・

なんだろう？

もう一度、掲示板を見て、

・・・気づいた。

4組には。

学年1、アイドル的存在の、

：雪原さんがいる。

フルネームで、【雪原 花音—y u k i h a r a k a n o n】。

噂で、竜くんのコトが好きって聞いたことがある。

：どうしよう。

すごく、不安だよ。

「わー：雪原さんも：4組だよ？

奈花、不安だよねえ？？？」

「うん……すっごく」

だって、雪原さんって。

すごく、可愛い。

肌は白いし、黒髪が太ももまであって、ツヤツヤで

さらさら。

パツチリした目。完璧アイドルフェイス。

性格は、おっとりしてるけど、言いたいコトが

ハッキリ言える、ってタイプ。

意外と、行動派なの。

そしてなにより、男子からも女仔からも、すごく人気がある。

「と、とにかく、教室行こ？」

予鈴なっちゃうし」

今度は、紗梨奈が私を引っ張ってく番だった。

雪原さんと、竜くん。

考えると、

……お似合い。

帰ると、お母さんがそう言った。

あ~~~~!! 忘れてた!!!

「わ、忘れてないよ。」

「ぢ、ぢやあいつて来ま↓す」

わたしは、玄関においてあったレッスン用の鞆を持つ

て、家を飛び出した。

[illegible]

ピアノ。

ピアノは、3歳の頃から、習い始めてた。

高1の音楽の時間。

紗梨奈と、音楽室のピアノを弾いた。

竜くんに聴いてもらったこともあった。

今、弾いている曲は、「乙女の祈り」。

よく、オルゴールとかに使われてる、有名な曲。

私にとっては、難しい曲。

5月の発表会で、弾くことになっている。

発表会のチケット…

余分に5枚貰ったんだけど…

…竜くん、誘ってみよっかなあ？？

…ッよし！！誘っちゃおう！！

ってことで、1枚は竜くんで。

あと4枚なんだけど…誰誘おう？

うーくん、あとはー？？

紗梨奈は、私と同じく、ピアノの発表会であるから、

あげる意味ないし。。

——ま、いっかあ。

そうこう考えてるうちに、ピアノの練習教室の前に来

ていた。

カラカラカラー――

ガラスの引き戸を開けて、中に入って、階段を上る。

2階が、私のレッスン教室。

「こんにちは――」

「こんにちは、奈花ちゃん。」

乙女の祈り、弾けたかしら???

「む、難しいです」

あーあ、なんかピアノ見てたら：

竜くんと、雪原さん。

思い出しちゃった。

竜くん、雪原さんが好きなのかなあ。

雪原さん、竜くんが好きなのかなあ。

私――。

すっごく、不安。

それが頭の中で、ずっとグルグル回ってるよー。

「そう。でも、5月の末には発表会だからね♪」

ニッコリ、笑う先生：

せ、先生——。

笑顔が黒いよ!？

……怒ってる……？

ご、ゴメンナサイィ……進歩してなくて……

こんなだから、竜くん。。。

何でもできちゃう、雪原さんと——？

そんなの。

そんなの……嫌だよ。

私、竜くんがいたから。

変わったの。

竜くんのために、変わったの。

だから……

見捨てないでよ……

私まだ、
【竜くんが雪原さんのことが好き】
って

きまつたことぢやないのに、

いやなこと、いろいろ考えちゃうよ。

「……やん。」

……ちゃん？

…花ちゃん!?

奈花ちゃん!!!!!!!!!!

ハ
ツ
○

今、呼ばれてたよね???

き、気づいてなかったよ。。

「奈花ちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

「ご、ゴメンナサイ!!」

やばい。

これは…非常にやばいです。

「さっきから！！なにボーっとしてるの！？！？

こんなんじゃ、いつまでたっても弾けるようになら

ないわよ！！！！」

ひ、ひえええ～～～～！！

お、怒らせちゃった；；

「奈花ちゃん、わかってる？」

紗奈ちゃんはもう、最後までスラスラ弾けている

の。あとは、暗譜だけだわ。

それに比べて、奈花ちゃん！！

……………！！」

うわッ、最後のほう早口で聞き取れない！！

あ、紗奈（↑さな）ちゃんっていうのは、

紗梨奈のこと。

紗梨奈…さりなの「り」をとって、さな…紗奈。

紗梨奈の、ニックネーム。

そっかぁ。。。。

紗梨奈、ピアノ上手だもんなぁ。

同じ年の中でも、右にでる人、いないもん。

飛びぬけて、上手。

私は、下手。

「……………!!!」

…とにかく。奈花ちゃん。

弾いてみて。ほら、楽譜だして!!」

なのに、私。失敗ばかりだ。

楽譜をだしながら、ちらっと時計を見ると。

あと、10分。

「まず…とにかく最初っから」

「ハイ；；」

♪ ~ ♪# ~ ♪₁ ~
♪# ~ ♪ ^ ^ ~

♪ ♭₁ ~ × ×

あ、…間違えた；

「ま・た、そこなの！？！？」

奈花ちゃん…いつになったら、なおるのかしら」

プツン。

自然に、ピアノの音が止む。

「奈花ちゃん、『来週までにスラスラ弾けるように』

っていうのが目標でしょう？」

「ハ、ハイッ！！」

「続き、弾いて頂戴」

♪ ♭₁ ~ . . .
・ ♪ ~ ~ ♪
♪ - - ♪ ^ ^ ~

そうやって、弾いてるうちにも、『柔かく』とか、

『もう少しフォルテ』って、先生が指示する。

♪ ♯、 ~ ~ ♯ ~ ~
♪ ♯ ~ ~ ♯ ~ ~

「やっぱり、おなじところね。」

ここは、もう少しつよくていいの。

。。。……

あら、もう時間だわ。

来週、がんばってね？ さようなら」

「—ありがとうございます、さようならッ」

あーもう。つかれた!!

…先生、怖かったなあ……。。

私は、ピアノ教室の引き戸を開けて、外に飛び出す。

ふうふう。

もう、息が詰まる。

私、おもいっきりため息をついて、家に帰った。

友情＋涙

次の日の朝―。

昨日の夜は、全ッ然眠れなかった…

徹夜！！

久しぶりだな…

テスト勉強以来だよ。

…。

徹夜の理由―。

それは、竜くんのせいだよッ！！

クマできてたら、どこしてくれるのよ！！！！

開き直っても、しょうがないのに。

は、早ッッッ！！！！

チャイムが鳴って、インターホンに映ったのは、紗梨奈だった。

私は、あわてて受話器をとった。

『ハイ！！紗梨奈、今日は早…』

『ちょっと聞いて！！それどころじゃないのよ！！』

インターホンにでた私の声をさえぎった紗梨奈は…

みるからに、すっごく怒ってる…みたいだった。

『ちょっと待って！！私まだ支度できてない！！』

あ、いいや』

私は、ドアに向かった。

今、両親はいない。

紗梨奈をいれても、ばれないし！！

ガチャッ

「紗梨奈、入ってきて！！」

私、まだ支度できてないの。寒いでしょ？」

「あ！ありがと！！」

紗梨奈は、お辞儀しながら、

入ってきた。

「今親いないの。」

…それで、なにがあったの！?!?」

紗梨奈を待たせちゃいけないッ!!

私は、急いで着替え始める。

「私ー、決定的瞬間を……」

見ちゃったの。

竜くんと、…花音ちゃん——えっと雪原さんが…」

「竜くんと花音ちゃんッ?!?!?!?」

って、紗梨奈呼んだじゃん？

……友達?？」

それと!! それと、何!?

竜くんと雪原さん、なにかあったの?!?」

もう、寝耳に水!!!! (↑寝てないケド!!!)

私、持っていた学生鞆、取り落としてしまった。

「うん、花音ちゃんは友達なのッ!!」

驚かないでよ!?!?

気絶しないでね!?!?

じつは…実は、竜くんと花音ちゃん…

一緒に登校してたの!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

仲良さそうで…」

え? ? ?

一緒に、登校？

一緒？？？？

突然、目の前が暗くなった。

信じられない。

竜くん、どうして？

…ひどいよ、竜くん。

もう、私なんか…好きぢやないの？

雪原さんのほうが、好きなの？

「……………う、そ…」

ふいに、視界が潤んだ。

まわりが、緩んで見える。

冷たい雪が零れ落ちて、頬を伝った。

ドウシテ？

「嘘ぢゃ、ないの。」

竜くんと花音ちゃんだったの。

2人で、登校してたのよ！?!?!

私ッ、私、許せない!!!! 竜くんもッ、花音ちゃんもッ

ひどいッ…よ、竜くん!!!!!!」

紗梨奈、泣いてる……?!

私の為に、泣いてくれてるの???

「いッゃだよ、私ッ!!!!!!」

雪原さんッ、どうして???

どうして、わたッ…しの大切なものを…とってっちゃ

うの??? ひどッい!!」

あとからあとから、どんどん涙が頬を伝う。

声が、途切れ途切れになってしまう。

「やだ、私たち…こんなんぢゃ、学校行けないよ。

ねえ、今日は、サボらない??

竜くんたちのこととか、考えよう?」

「うん」

初めての、サボり。

私も、紗梨奈も、初めてだった。

雪原さんって。

「花音ちゃんはね、とっても優しい子なんだよ。

すごく…純粋なの。

なんでも出来るってカンジだけど、そうぢゃなかった。私と一緒に、フツーの子だったの。

花音ちゃん：1つのコトにすっごく頑張る子」

という性格の子なんだって。（紗梨奈談）

いい人だってコトは、わかってた。

だって。

高1の頃――。

貧血で、倒れかけたのを。

雪原さんに、助けて貰ったことがある。

その時、

「大丈夫？」

って、心配してくれた。

小首を傾げる、雪原さん。

それが、淡い存在だった雪原さんを、初めて知った

時の、思い出。

その後、一緒に保健室について来てくれた。

雪原さんは、本当にいい人だった。

「ありがとう、雪原さん」

そう、私が言ったら、

「ううん、全然…たいしたことじゃないわ。

和泉さん、私のこと覚えててくれたのね」

………今になって、思う。

《覚えてくれてたのね》

って、

私と、雪原さんは…この頃より前に、話したこと…

あったかな？

わからないけど、雪原さんを、恨んだりしたくない。

そう思った。

2人のカンケイ

「紗梨奈、私」。

雪原さんを恨んだり、したくないの。

竜くんがもし、雪原さんのこと好きだってわかって

も…」

今の私は、綺麗事ばっか言ってる。

もう、【生まれ変わったわたし】ぢゃない。

【生まれ変わったわたし】の仮面が剥がれて。

【もとのわたし】に、戻ってしまった。

「うん、そうだね。少しの間は、2人がどれだけ

仲いいか、見てるよ、私。

それで、結果を見て竜くんに講義するか!」

「うん!! そうする!!」

協力お願いね、紗梨奈!」

「任せろ!」

そう言って、私たちはとお互いの両手を

合わせた。

「あッ! 私、花音ちゃんに聞いてみようか?」

「??? 何を?」

紗梨奈は、不敵にニヤリと笑って、

「竜くんのこと、ど・う・お・も・っ・て・る・か!!!」

「ああ、そうゆーことね?」

でも…いいのかなあ」

雪原さんにも、事情とか…あると思うし。。。。

紗梨奈だけに聞いてもらうってのも、ちょっと悪い。

「私はいいよ？奈花、辛いでしょ？」

「辛い…けど、私も行く！」

あ、でも、2人の様子見てから、でしょ？」

「そう！」

私も、雪原さんに聞きたい事、あったし。。。。

って、聞いてみよう。

私が忘れてるだけ、なのかもしれない。

けど。

私と雪原さん、つながりがあったのかもしれないから。

だから行った。

雪原さんがいた。

竜くんもいた。

仲良さそうで。

目の前が暗くなった。

「……………う、そ…」

2人は家に……

「……………奈花!!!!!!!!!!」

逃げたい

消えたい

死にたい

きやあー

なんでなの？

なんで私を裏切って・・・。

そんなひどい・・・。

やめる。

竜くんとは

や・・・めるんだ・・・。

「奈花！」

逃げた。

弱すぎる私。

きっと雪原さんは強いんだろうな。

もう寝よう。

チャラチャラ♪

もしもし！

「奈花！もう朝だよ！学校来ないの？」

行きたくない・・・。

「いめん・・・。」

電話を切る。

涙がまだ止まらない。

もうやめたのに・・・。

何で私だけこんな悲しい思いを・・・。

いつのまにか閉じこもってた。

ピアノも無断で休んだ。

でもね。【乙女の祈り】

練習してたんだよ。

ピアノを弾いているときは何でも忘れられるから……。

哀しいとき。寂しいとき。悔しいとき。

竜・・・。

そんなあるひ。

ピンポーン♪

・沙梨奈だ！またなんか徹底的瞬間を見たって言いに来たんだよなあ・
・。・

嫌だなあ。

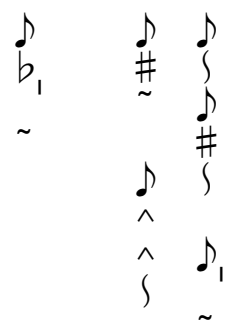
一人がいい。

ごめん。

無視をしてしまった。

こんな初めて。

ピアノひこつと。



♪ ~ ♪ # ~
♪ # ~ ♪ ^ ^ ~

♪ ♭ ~

どんなことも忘れる。

ずっとピアノを弾いていたい。

もう・・・

何も考えたくない・・・。

チャラチャラ♪

あつ。メールだ。

「おまえなんで学校来ねえんだよお！
さばり禁物だぞお（||。ω。）ノいよう」

竜くんから・・・。

「別に・・・。」

チャラチャラ♪

「心配するいい彼♪」

は!?

なにがイイ彼だよむかつく。

「うざい。」

初めてこんなメール打った。あとで後悔した。

もうやめたのに。

竜に会うとなんでも私は回されちゃう。

風みたいだったね。

また涙がでた。

チャラチャラ♪

「窓あけろよ。」

ガチャッ!!

あれ？

「竜……くん……？」

「お誕生日おめでとう♪」

あれ？今日誕生日だっけ？？

「馬鹿！うちの誕生日は6月の23日！！」

「あれっ？そうだったけ？まあいいからこいよお！！」

2階の窓から思いっきり竜くんに飛び乗った。

「お前重いなあ。」

カーーーーーー／／／

気のせいです!!

きづいたら竜くんといった。

この人はどれだけ私を困らせるのだろうか。

もう・・・。

3章 凍える心

それから。

私は、学校に行くことにした―。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

学校復帰の前日。

私は、紗梨奈にメールをした。

「この前わごめんね。」

明日から、学校行こうと思ってるんだけど、

一緒に行けない??」

そう打って、送信した。

チャラチャラ♪

紗梨奈から、即レス。

「よかった!! 私と一緒にいきたいッ!!」

——よかった!!

実を言うと、紗梨奈に断られないか…

そう思って、すごく不安だったんだ。

「ありがとう!! 嬉しい♪

そういえば…雪原さん& a m p; 竜くん、変化あった!？」

送信っと。

…変わりがあったら、怖いけど。

ないことを祈って、送信した。

♪

「それが・・・ヤバイほどあった。

……聞きたい?」

や、ヤバイほど…!?!?!

こ、怖い。

けど。

「お願いッ!! 教えて!!」

と打って、送信した。

知りたくないけど、知らないほうの怖い。

そう思うこともあったから。。。

♪~♪~

え!?! 電話?!?

私は、あわてて通話ボタンを押した。

『ハイ!!』

『奈花!?! ホントに聞くの? 大丈夫??!』

心配…してる。

それ程、すごいことなの!?!?

『…聞く。聞きたいの』

『わかった。あのね……』

深呼吸をして、紗梨奈の声に集中した。

『いい？』

私、また見ちゃった。

花音ちゃんと竜くん、ファーストフード店で食事してた。

2人つきりよ？信じらんない！！

まだ、あるの。聞く？』

食事？？2人つきり！？……デート！！！？

私、彼女だけど！！まだ2人で食事してない！！よ？

『聞く』

『了解☆』

ほかの子から聞いたハナシ。

ゲームセンターで目撃！！またもや2人つきりよ。

花音ちゃんに、UFOキャッチャーでディズニーの小さいミニー

をとって……！　　そこでプレゼント！』

え————！？！？

今度はプレゼント！？！？！？

私、UFOキャッチャーで、うさぎのぬいぐるみとって貰っ

ただけど！？

雪原さんと私、竜くんにとっておなじ存在なの！？

『ひどいと思う！！彼女がクラスメイトとおなじ扱いなんて』

『———』

なんか、泣きそう。

聞いてよかったっておもってる。

けど、竜くん。

それはあんまりだよ。

何考えてんのよ……！！！！

『あ……！私もう行かなきゃ……』

ピアノ行って来る！またねい！』

プツッ。

ツーツーツーツー…

私、それからしばらく。

心が、冷たくて。

寒くて寒くて…

竜くんに貰った、うさぎのぬいぐるみを…

意味もなく抱きしめてた。

--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

次の朝。

♪~ピンポーン

紗梨奈が迎えに来てくれた。

「おはよう、久しぶりだね!!」

「おはよう、ホント久しぶり…」

奈花、思ったより元気そうで…よかった」

紗梨奈はそういつて、にっこり笑った。

穏やかな朝だった…のもつかの間。

また見てしまったんだ、雪原さんと竜くんを―。

2人で、登校してる…。

ショックで。

悲しくて。

雪原さんが羨ましくて。

私は、しばらく2人を見ていた。

「うわッ!! 朝から不吉なッ…!!」

でも奈花。気にすることないよ、行こう?」

「――うん」

そう返すので、精一杯だった。

歩き出しても、視界に入ってくるのは…

楽しそうに雪原さんと登校してる、竜くと。

嬉しそうに竜くんと登校してる、雪原さんだった。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

教室にはいる、と——。

「奈花ッ！？奈花だ！！」

うわ、すっごく久しぶり！！どうしたの！？」

駆け寄ってきたのは、クラスで仲のいい、

緑河^{ミドリカワ} 凜柚^{リユ}だった。

「凜柚！！久しぶり！えっと…ちょっと風邪こじらせち

やって。寝てたの、ずっと」

「そうなの！？大丈夫だった？」

…！！あ。大変だよ奈花！竜くんが浮気…！！！！！！」

凜柚も、知ってたんだ…。

なんか、複雑だよ…（泣）

「うん、知ってる。雪原さんと、でしょ？」

ってゆーか凜柚も、見たんだ…決定的瞬間…！！！！

「知ってたの？何処で見たの？？」

ま、まさか！和泉奈花はエスパー！？」

「そんなわけないじゃない！私が教えたの…！！！！」

エスパー…！！…？？

才能あったら…便利かも！

「水野紗梨奈…！！あんた、病人にそんなことを…！！？」

凜柚はびっくりすると、人の名前をフルネームで叫ぶ…！！

…のが癖。

「大丈夫大丈夫！」

「あんたはねッ!!」

この2人、漫才やってるみたい。。。

♪~キンコーンカーンコーン

「ほら、席ついてー!!!!!!」

HRが始まったー。

「……じゃあ、授業の用意をしろよー！」

一時間目は…理科か。急いで行けよ!!」

先生は、教室から出て行った。

今日は金曜日。

理科の次の時間は、音楽。

「紗ー梨奈ッ！！理科室まで行こッ？」

「勿論、行く！！」

ね？今日って二時間目が音楽でしょ？

早く行ってピアノ弾かない??」

「弾く!!」

先生が来るのを待ってる間、ピアノを弾く。

家にピアノはあるけど。

音楽室のピアノは、グランドピアノ。

だから余計に弾きたくなる。

ピアノを弾くために、音楽のある日は、理科の用意+

音楽の用意を持っていく。

「美術、今日何するんだっけ!？」

「さあ...??」

なんか新しいことするみたいだね」

「なんだろう？」

そんな話をしながら、2人で廊下を歩いていく。

隣の4組：竜くん・雪原さんたちのクラスは、1時間

目から、音楽。

だから、よく竜くんに会うんだ。

…今日はどうだろう？

————会えるかな！？

あっ！竜くんいる。

でも竜くんは、今紗梨奈が好きっていつてる竜くんの親友・瑞樹くんと一緒だった。

雪原さんは、ほかの男子と仲よさそうに喋ってた。

「えっ！考えられない二股！？奈花！泣かないで！」

「！？二股！？そんでもし雪原さんがその男子と結ばれれば竜は私のもの！！！」

「ちょっと奈花！普通自分の彼が二股かけられてたら怒るの！！！」

「きゃー！！！！ちょっとおどかさないでよ凜柚！」

二股。

竜くと雪原さんはどれだけ私を痛みつけるんだろ。

「奈花！それよりピアノひこうよお！！」

「連弾しようよお♪」

やっぱり紗梨奈はうまいなあ・・・。

キンコーンカーンコーン♪

チャイムがなった。

音楽の授業って簡単に眠くなっちゃう。。。

はぁぁ。。。

キーンコーンカーンコーン！

うわぁ寝ちゃった！

席後ろでよかった。

先生にばれなくて・・・。

「奈花！よだれ！」

「あっ！」

「それより今日海行かない！？」

「行くー！凛柚はあ？」

「私も行くー！！」

「じゃあ2時に奈花の家集合♪」

「そして2時」

みんな海に行った。

「話があるの竜。」

かすかに聞こえる声、

竜くと雪原さんの声だ。

「なんだ？話って。」

「私……。妊娠しちゃったの！」

「えっ！」

「私生みたいの……。でもね……。」「

雪原さんの子供！？」

竜くんと雪原さんの子供！？

「竜ひどいよ！」

紗梨奈が竜くんをひっぱたたいた。

「そうだよ！奈花っていう彼女がいるのに二股！？
しかも雪原さんもほかの男子といちゃついて。奈花が可哀想。」

凜柚もでた。

紗梨奈が奈花を竜くんの前に運んだ。

「謝って。ちゃんと奈花に謝って。」

「それでもって雪原さんとも奈花とも終わらせて。」

「まって紗梨奈。竜くんは二股をかけえるような人じゃない。もう終わらせます。さようなら。」

「奈花！？それでいいの？初彼だよ。今年で4年も付き合ったのに別れるって……。」

真実の糸

「ちょっとまって！」

「またない。今まで楽しかったです。本当にさよなら。」

奈花はなきながら歩き出した。

「ちょっと待てよ！」

大声でさけぶ。

「別れたくなんかねーよ！かつてにきめるな！雪原はおれのいところだ！一緒の家にすんでるの。体が弱くて入院もしてたんだ。だから一緒にいたんだ。おれは」

「おまえが好きだ！」

「えっ！」

沙梨奈と凜柚が顔を真っ白にさせている。

「おまえが好きだ！」

「竜くん！」

走り出した。

竜の胸の中に。

暖かいまなざしを求めに。

今胸に飛び込みました！

2人はないている。

「よかった。竜くんがいなくなったかと思ったんだよ。」

ずっと凍ってたわたしの心が竜に温もりで溶けていった。

「じゃあ泳ごう！」

えっ！まだ6月。

沙梨奈なにいつてんの！

「紗梨奈ムード壊しちゃだめだって。3人で泳ご！雪原さん！」

凜柚。紗梨奈。ありがとう。

「まじ冷たいー」

「あたりまえだよお！」

かすかに聞こえる友の声。

こんな楽しい時間もすぐ終わって。

「奈花！！！！今日は発表会の最後のレッスンなんだからね！！！」
帰ってくると、お母さんが待っていた。。。

「忘れてた！やばいやばい！」

そういえばまだ竜くんさそってないなあ・・・。

「奈花なにぼけっとしてるの！早く行きなさい！」

「はあい！」

ピアノの発表会。紗梨奈もでるんだよねえ。

ピアノ終わった。

メールしよつと。

と思ったらメールたまってる。

ピロピロピーン！

今1通きた。

「窓開けてみい♪」

ガチャ。

ナイスタイミング！

二階の窓からジャンプ！

今日も抱きつき肩車で道を歩いた。

「ねえ。今週の木曜日の祝日暇？」

「暇。」

「ピアノの発表会があるんだけどこれる？」

「あたりまえだよー。もう！！」

よかった。パンフレットを渡して肩車から降りて家へスキップしながらかえっていった。

「奈花！ちよお！俺の話を聞けー！」

…そんな声なんて無視して。

まちがった曲

発表会、当日。

私は、紗梨奈と集合して、会場に向かった。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

会場するのを待つ最中……

「ああ、やばい！！！！心臓ドキドキしてる！！」

「わたしも！！人・人・人、で飲む！！おまじない！！」

「ぷっ！！奈花古ッ！！！！」

そんな、他愛ない話で緊張をまぎらす。

「奈花！！！！……つと紗梨奈！！」

突然話しかけられて。

振り向いたら、竜くと……

「みッ!! みみみみみッッ」

うしろを振り返ると、紗梨奈がみるみるうちに…

赤くなった。

「「瑞樹くんッ?!?!?!?!」」

「よっ!! 和泉、成宮!!」

私と紗梨奈がびっくりしていたのもきにせず、

瑞樹くんが片手をあげた。

「瑞樹の妹も、この発表会であるから、一緒に」

順番は、最後から三番目・奈花、紗梨奈の順番。

あっ! あと3番で私の番!

あっ! どうとう私の番になっちゃった。

ステージにでた。

なぜか緊張感が消えた。

私はボーっとしてる。

……。

なぜか私は、乙女の祈りを弾いていなかった。

ちがう、旋律。

これって…

ラカン・パネラ。去年の発表会の曲。

なにやってるんだろう私。

でも何でかわからないけど・・・。

この心のもやもやはなんだろう。

まるで桜の精がこの曲ひかないでって指を押さえているような胸の
いたさ。

そんなふう to 時を過ごし

もうはやくも19歳。

大学生になっていた。

——*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—

17歳の、ピアノの発表会。

あの時。

乙女の祈り。

何故か…今弾いちゃいけない気がして。

【乙女の祈り】を弾くことが出来なかった。

あんなに練習したのに。

なんでだろう…？

――。

その答えが、近づいてきたことに…

私は、なにも気づいていなかったんだ……。

乙女の祈りが、弾けなかった…

発表会も終わった。

先生が怒ってる。

でも、少しも話を聞いていなかった。

奈花の発表会は失敗に終わった。

竜くん・・・

ごめん・・・。

「奈花。とってもうまかったぞ。」

そのとき交わしたキスはとても暖かった。

あのもやもやは、なんだったんだろう？

その答えは、後から知ることになる――。

4章 デート

大学。

同じ学校だけど、

私と竜くんは、違う学部に進んでいた。

私は音楽科、竜くんは普通科。

寂しいけど、これが今の、

2人の距離。

——*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—
—

学部も違うし、校舎も違うけど。

休日には、竜くんと会える。

そして、明日。

大学生になってからの、初デートなのです!!

行くところは、まだわからないけど。

すっごく嬉しい。

だって、ずっと忙しかったから、会えなかった。

楽しみ!!!

何処いくかは、秘密って言われてる…

…なんで!?!?!

う~~~~ん?

水族館?

遊園地？

………何処でもいいやッ！！

竜くんといけるなら、何処でもいいし！！

2人でも、いろんなところ行けるよね！？

じつは私。

もし、地球が爆発するなら。

その人が嫌がっても。

カケオチしちゃおうッ！！

ってかんがえてたからッ！！

………おかしいけど、最期なら！！

って意気込みでね??

♪~♪~

枕元においてあった携帯が鳴り出した。

この着信音!!!!!!

竜くんからメール!!

いそいで私は、携帯に飛びついた。

「奈花ッ!

明日の予定なんだけどさ!

1時に迎えに行っていない?」

1時!?!?」

昼から？

「奈花だよ♪」

全然大丈夫！！…何処行くの！！？」

♪～♪

「さあ、それは秘密だから！！」

おあずけ、かあ…（泣

ま、いいや。あしたのお楽しみ！！！

「わかった…。

楽しみにしてるねッ！！！」

♪～♪

「俺も！！！！じゃあ、また明日なッ！！」

朝……9時40分……？

微妙かも。

てか、寝すぎ？

うーん、と手をのばすと、欠伸がでた。

「ひゃあ！？冷たッ！！」

床に足を下ろすと、すつごく……冷たい。

……春、だよね！？

急いで靴下を履く。

その後、昨日用意しておいた服を着た。

眠~~~~い!!

うとうとしてると、寝てしまいそうになった。

その後、パソコンをつけて、今日の運勢を見た。

乙女座…は…

あった!!

三位かあ…。

なんか、いいことありそうかも!

《乙女座のアナタ!!

全体運★★★☆☆ 頑張りすぎると、逆に空回り!!

いつも通りのアナタでいこう！

恋愛運★★★☆☆　今日は恋愛を思いっきり楽しも

う。好きな人にデートに誘われたら、行きたい所をハッ

キリ言おう！アナタから積極的にリードするのが

運のカギ♪

ラッキーカラー　白。真っ白なアナタで！！》

ってことは、【頑張り過ぎない】・【ハッキリする】・

【積極的に】　ってことだね！？

ラッキーカラーは、白かぁ！

…なら、白い服着てこうかなッ！！

白い服に着替える・・・！！

まだ、時間あるし。

小説よんでよっかな。

12時―・

お昼、パンを食べた。

今は、12時30分。

…なんか、ドキドキするなあ……。

久しぶりッ!!…だし!!

♪～♪～

ん？

鞆に入れておいた携帯がなった。

竜くん用の曲、メールの着信音。

携帯を開く、と。

「はよ!! 起きてっか？」

当たり前前に・・・起きてる!!

「おはよ〜! 勿論、おきてるよ!!」

そう打って、送信する。

♪

「珍しい!! あの奈花が、起きてる!?!?」

「今日は頑張ったの!! もう行くばっかなの!!」

たしかに、私は遅刻魔ですよーっだ!!

ちょっとくらい、ほめてよッ!!

・・・っていうのは、冗談ッだけど!!

「うわッ!! 明日、雪が降るぞ。奈花が珍しいこと

するから〜!!」

「降らないもん。絶対ッ対に降るわけないッ」

からかい合いも、なんか久しぶりで。

すっごく、嬉しい!!

「あのさあ、準備できてんなら、今から迎えに行く

けど…いい？」

今から!?

それにはビックリしたけど、OKのレスを送った。

ピンポーン♪

え!?!?!

誰?!

竜くん…にしては、まだ早いよね!!?!

『はい?』

インターホンに映ったのは…。

『え!?!?!? 竜くん?!?!?』

なんで!?

『早いだろ?』

うん、早い。

でも、竜くんを待たせちゃいけないと思ったから、

自分の部屋に駆け込んで、鞆を引っつかんだ。

バタンツ!!

いつもより何倍もドアがなった。

「おはよう!! 早かったね!!」

「はよ。実はメールしてた頃に家でした」

あ、そうなの。

って…

「ええッ！？何でそんなに早く！！」

そう聞くと、竜くんは一瞬きょとん、とした。

「一分でも早く会いたいから…だった？」

竜くんはそういうと、今度は急に赤くなった。

「あははッ！！　　竜くん林檎だよ！！」

「うるせー！！　　恥ずかしいだろッ！」

あ、照れてる。…よねえ？

「竜くん照れてる！！」

私は、ここぞとばかりにからかいまくる。

竜くんは、困ったように笑って、

「まあ…本音だからッ」

と言った。

本音？

さっきの言葉を思い出す、と。

《一分でも早く会いたかったから》

「ええ！？／＼／＼」

「ほら、奈花も林檎！」

…やられたッ！！

顔が熱いッ／＼／＼

「も、もうッ！！」

と、とにかく何処行くのさ！？」

「え？動物園か遊園地」

さらっと竜くんが言った。

動物園か、遊園地？？

それならっ！！

「選んでいいの??」

「そのためだしッ!!」

やった!!!

竜くんが歩き出すから、歩調に合わせて着いてく。

「遊園地ッ!!!…がいいな」

「言うと思った」

「だって、憧れだったんだもん。彼氏と遊園地」

そんな話をしながら、私と竜くんは近くの駅から、

電車に乗った。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—
——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

「着いたあ〜!!! いい天気だね、竜くん!!!」

「券買うぞ、券」

私…もしかして浮かれすぎ！？イタイ？？

券の販売機で、1000円分の券を買った。

「まずは、何乗る？」

「ジェットコースターでしょ！！」

「ってごめん、竜くんどこがいい？」

「うわぁ、恥ずかしすぎるッ！！」

「竜くん、あきれちゃったかなあ？」

「いや、俺もジェットコースター乗りたかったか

ら！！観覧車、最後に乗ろうな？」

観覧車！！

なんか、緊張しちゃうなあ…。

この遊園地…デートスポットで、カップルで観覧車

乗ると、離れないでいられる、とかッ！！

友達…紗梨奈に聞いた！！

「んじゃ、行くかッ!! 走るぞ」

え？

いきなり手を引っ張られたかと思うと、竜くんは走り

出していた。

「ちょ、待って速ッ!?!?!」

・
＊
・

『まもなく発車します………』

プーーーー。

ブザーの後、最初はゆっくり走り出した…けど!!

「きゃーーーーーーーーー」

一つ目の坂を下った瞬間、すごいスピード!!

速すぎるーーーーー!!

もう、その間叫びっぱなし…;;;

・
＊
・

・
＊
・

「奈花、叫びすぎだしッ!!」

「だって、…速かったし」

次の目的地…

恐怖のおばけ屋敷に向かう途中。

あ、おばけ屋敷は、竜くん無理やり決められた。

私、おばけ屋敷すっごい苦手なのに!!

ど、どうしようー!。。。。

「あ、ついた」

「ひ、ひええええ;;」

「奈花、おびえすぎ」

竜くん、係員さんに券を渡すと、さっさと歩いて行っ

ちゃったんだ。

「りよ、待って!!!!!!」

うわッ!見るからに怖ろしい!!!!

「奈花遅い」

怖い。

「やだ、怖い怖い怖いッ!!」

一枚。二枚。三枚。。。<

……いちまい?

………に、まい？

「お、おおおおお岩さん！？！？」

血、血、血！？！？

バターーーーーン！！

お岩さんにびびってる瞬間に、今度は障子が倒れる。

〈ぎゃーーーーーーー〉

「きゃーーーーーーー」

も、もう駄目。。。。

その後、なにが起こったのか…わかんない。。。。

「奈花！！」

そんな声を聞いたような…気がした。

交わした約束

「奈花ッ!! 奈花!!」

あれ、竜くん？

「奈花!!」

「あ…れ?? わ、たし…?」

気がつくと、ベンチで寝てたみたい？

でも、さっきまで…おばけ屋敷に？

「おばけ屋敷で倒れたんだよ!!」

……はい？

ええええええええええええ!!?!?!?

「い、ごめんね!!!!!!」

「奈花が大丈夫なら、俺は別に!!」

……立てるか？」

竜くん……やっぱ、優しい。。。。

「たぶん、大丈夫」

ちょっとフラッってしたけど、何とか立てた。

「本当か？無理すんなよ？」

そういつて、竜くんは手を貸してくれた。

「大丈夫だよ、ありがと……って今……」

「夕方」

ゆ、夕方！？そんなに寝てたの！？

「ほんつとにごめん」

「いいよ、別に。そうだ、あの店見ねえ？」

そういつて、竜くんが指差したのは……

遊園地の中にある、おしゃれなお店。

「うん、行きたいッ!!」

カララーン♪

お店の扉を開くと、鐘の音がした。

「うわ、キレーイ！」

なかは、ぬいぐるみのコーナーもあったけど、

カップル用に、アクセサリなども売っていた。

やっぱり、デートスポットだから、かな??

「ねえ、竜くん…、その。

ペアリング、あったらほしいな？」

恥ずかしいッ!!

けど、占いにもあったし!!

「俺も。見ようぜ？」

「うん、嬉しい!!」

アクセサリーコーナに行くと、予想通り。

ペアリングが売っていた。

「なあ、これよくね？」

リングを見ていた竜くんが差し出したのは・・・。

リングの横つちよに、ちっちゃい、

四ッ葉のクローバーをかたどった、ものだった。

「可愛い!!」

「これに決定？」

「うん!!」

竜くんは、リングをレジに持っていった。

お金払う!! って言ったけど、やんわり。

竜くんに断られてしまった。

「ちょっと預かる!!」

観覧車乗ろうぜ？」

「あ、乗りたい!!」

観覧車。

近くだったし、お客さんが少ないから。
すぐに乗れた。

・
＊
・

「奈花」

「は、はい！」

観覧車!!!

男の子と2人っきりは初めてだったから／／／
どうしたらいいか、わかんないッ!!

「リングを渡す前に1つ。

君付け、やめない？」

竜くん、のくんづけを、やめる？

ってことは、竜って、呼ぶの??

抵抗あるけど・・・

「うんッ! わかった!!」

「じゃ早速」

「なに？」

そうだった瞬間、竜が項垂れた。

「名前!!」

「あッ!

えっと．．．．．竜！」

「上出来」

ポンッ。

竜の手が、軽く私の頭に当たった。

「奈花」

「なに、竜」

竜？

真剣な顔？？？

「手、出して．．．目、閉じて！！！」

リング？

私は、竜に言われたとおり、手を差し出した。

「ずっと、一緒にいような！」

「うん、ずっとね！」

竜がそういつて。

私が答えたあと。

竜は、リングを私の薬指にはめて。

その瞬間。

竜の唇がそつと。

私の唇に重なった――。

これが、最初で最後の、**【誓いのキス】**

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601e/>

乙女の祈り

2010年10月22日00時47分発行